氏　　名　荻野篤彦（おぎの あつひこ）

学位の種類　医学博士
学位記番号　論医博第815号
学位授与の日付　昭和54年7月23日
学位授与の要件　学位規則第5条第2項該当
学位論文題目　小児掌蹠丘疹性紅斑性皮膚炎（いわゆる砂かぶれ）について

論文調査委員　（主査）教授 安平公夫　教授 大島駿作　教授 太藤重夫

論文内容の要旨

主として4歳までの幼児の手と足，とくに手掌面に瘙痒性のびまん性または斑状の紅斑および小丘疹，漿液性丘疹を生じ，「手のひらが赤く，痒くなってきた」と訴えてきた患者が京大附属病院と長浜赤十字病院の両施設の皮膚科外来において2年7カ月間に77例（男34人，女43人）を数えた。手指あるいは足趾の側面に瘙痒性の小丘疹ないし漿液性丘疹が初発することが多いが，主たる皮疹は手掌，まれに足底に生じるびまん性ないし斑状の紅斑，または小丘疹や漿液性丘疹などで，手指末節または指間部附近に浮腫性紅斑の増強をみることがあった。時に手背，まれに足背に常色ないし紅色の丘疹または紅斑性丘疹を散在性あるいは集簇性にみとめた。さらに，3分の1の症例に四肢あるいは顔面，軀幹に限局性で軽度ながらGinotti-Crosti(G-Cr)症候群にみるような丘疹やアトピー皮膚炎を思わす丘疹など多彩な皮疹を見た。手掌，足底の皮疹は1～2週すると糊糠様ないし小葉状に落屑し，さらに乾燥，粗造となり，皹裂を生ずるといった経過をたどり，治療に抵抗性で，ステロイド剤の内服，外用にもほとんど反応せず，全経過は2週間から3カ月間であった。自験例と同一疾患と考えられる幼少児の手の皮膚炎は本邦では「砂かぶれ」あるいは「土かぶれ」と呼ばれており，砂，土，草，粘土，玩具など幼児の手に触れるものによって惹起される接触皮膚炎として理解されているが，はっきりした接触原が証明されてはいない。自験例を調べてみると，その後同じ遊びを続けていてもほとんど再発をみないこと，4歳までが全体の87％と大部分を占めており戸外でよく遊ぶ幼稚園児やそれ以上の年長児はほとんど冒されないこと，半数以上に手のみならず外来物質に接触しにくい足底にも皮疹が生じたこと，ステロイド剤の内服・外用共に反応しにくいことなどの理由から単なる接触皮膚炎としては説明がつかない。むしろ，好発年齢と発症の季節的変動に偏りが見られたこと，少数例ながら同胞例（2組）と保育所内発症（2例）がみられたこと，G-Cr 症候群にみるような皮疹が生じたことより，伝染性疾患，とくにウイルス性疾患の可能性が考えられた。7例についてEpstein-Barr ビールス（EBV）の抗体価を測定したところ，3例が EBV 初感染の抗体価を示し，いずれも異型リンパ球増多を示した。G-Cr 症候群との鑑別が問題であるが，自験例にみるような特徴的な掌蹠の皮疹については今まで報告はない。しかし，最近，G-Cr 症候群には小児の主として四肢に生じた原因不明の

丘疹性皮疹が含まれるとし，かなり広い概念として理解されており，掌蹠をも冒すことがあるとしている点から，自験例は主として掌蹠を冒したG-Cr症候群の特異な一型とみなすことも可能かも知れない。自験例はウイルス性疾患の可能性が大でありその診断には接触皮膚炎をおもわせる曖昧な病名である「砂かぶれ」をつかわずに，「小児掌蹠丘疹性紅斑性皮膚炎」の病名を提唱したい。

論文審査の結果の要旨

幼児の手足，特に掌に瘙痒性のびまん性あるいは斑状の紅斑や丘疹を生ずる病変は従来「砂かぶれ」と呼ばれ，接触皮膚炎として説明されて来た。著者は77例を詳しく検討し，大多数が4歳以下であり，季節的な発生数の変動を見，少数乍ら同胞例，保育所内発生があり，副腎皮質ホルモン剤に反応し難く，3ケ月以内に治癒し再発を見ないことなどから，従来の接触皮膚炎説を否定し，ウイルス疾患の疑を抱いた。7例についてＥＢウイルスのVCA, EA, EBNAの血清抗体価を測定した所，3例がＥＢウイルスの初感染と思われる抗体価を示し，かつ異型リンパ球増多を示した。これらの成績から著者は従来の「砂かぶれ」は，ウイルス性疾患である可能性があるとしている。

この研究は永年に亘り，接触皮膚炎の一型として扱われて来た本病変の接触皮膚炎性を否定し，ウイルス疾患の可能性を見出したものであり，皮膚病学の進展に寄与するところが多い。

よって，本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認める。